

棄児行（作者不詳）

斯の身 飢うれば 斯の児 育たず

斯の児 棄てざれば 斯の身 飢う

捨つるが 是か 捨てざるが 非か

人間の 恩愛 斯の 心に 迷う

哀愛 禁ぜず 無情の 涙

復児顔を 弄して 苦思 多し

児や 命 無くんば 黄泉に 伴わん

児や 命 有らば 斯の 心を 知らん

焦心 頻りに 属す 良家の 救いを

去らんと 欲して 忍びず

別離の 悲しみ

橋畔 忽ち 驚く 行人の 語らい

残月 一声 杜鵑 啼く

斯身飢斯兒不育 斯兒不棄斯身飢
捨是邪不捨非邪 人間恩愛斯心迷
哀愛不禁無情淚 復弄兒顔多苦思
兒兮無命伴黄泉 兒兮有命斯心知
焦心頻屬良家救 欲去不忍別離悲

解説 捨て子という現実を前に、子を捨てざるをえなかった親の心に同情して詠じたもの。

語釈 ※棄児行Ⅱ路上に放置された小児。

※不捨非邪Ⅱ捨てないのが悪いのか。

※無情Ⅱ情愛がない。親子の情をもあえて断ち切らねばならない怨み。※苦思Ⅱ苦しい思い。※黄泉Ⅱ冥土を意味する。※焦心Ⅱ氣をもむ。あせる、※頻属Ⅱ切望すること。

※良家Ⅱ富豪の家。※橋畔Ⅱ橋のたもと。

※残月Ⅱ空に淡く残っている月。

※杜鵑Ⅱホトトギスの別名。

通釈 この身に死地を免れ得る道といえ、子供を捨てる意外にない。親が飢えれば子は育たず。しかし、子を抱えていたのでは、親が飢えて死ぬ。そうなれば、子供とて生きる手段はない。子供を捨てるか、捨てないのか。親が子に慈愛の情を注がぬ者が一人とてあるうか。この場に至って心は乱れ、哀しみは胸をせき上げ、情容赦ない現実、涙が溢れやまない。また子供の顔を弄しても苦しい思いが残る。わが子よ、お前に運命がないならば、いつそ親子ともにあの世に旅立とう。もし、お前の命あらば、私の心を理解してほしい。出来れば、富裕の人に拾われて欲しい。お前との別離は悲しい。橋の襖より連れ立ち来る人の話し声。仰げば空に淡く残っている月。そして、血を吐くかのような杜鵑が鳴く。その声は正に哀痛である。